

# 山と博物館

第47巻 第7号 2002年7月25日

市立大町山岳博物館



2002.6.19 撮影

写真と文 峯村 隆

雪形発見！ その意味

写真の中央の山は、梅雨時の晴れ間に山岳博物館から望んだ残雪の南沢岳（二六二五m）だ。昨年、私はふとその残雪紋様に白馬、それも天駆けるペガサスを見てしまった。そうなるとう馬にしか見えなくなるのだから、人とは困ったものである。

大町市は本年の春に「山岳文化都市」を宣言した。そのファンファーレ的イベントとして五月から六月にかけて「第一回 北アルプス雪形まつり」が開催され、実行委員会諸氏・団体の活躍により芸術文化関連の多彩な催しを展開した。その一環として「雪形ウォッチング」や「雪形写真展」も行われ、私も手伝った。

ウォッチングの車中や写真展での解説の中心はいわば伝統的な安曇野の雪形であり、山の名前だ。

「えーあれが種まき爺さんの雪形で有名な爺ヶ岳でございます。えー実は爺さんも最初は赤ん坊でして、へそあたりの黒い点が成長して立派な爺さんになり、種まきの仕事を終える六月初旬には野良着姿で鋏をかついで消えてゆくんですよ。ほらあれ、あれですよ。」

こんな調子のおしゃべりを何度となくするうちに、私のうちに一種の後めたい気持ちが生ずる沈殿していった。「なぜ雪形は種まき爺さんで、山名は爺ヶ岳でなければならぬのか。それだけを一方的に伝えるばかりでよいのだろうか」と。

江戸時代の爺ヶ岳の名は、大町では北峰および中央峰を「五六岳」として南峰が「祖父ヶ岳」だったり、越中側では「梅山」や「梅谷峯」だったりした。眺める場所によって山容も風土に根ざした見る人も異なるのだから、信州側には特に、他にもさまざまな地方名があったはずだ。それはどの山も同様だろう。

またこの爺さんが苗代の適期を知らせる天与の農事暦だったとして、実際いつごろ現役で活躍していたのか定かではない。江戸時代も下るほど農業の技術や知識も向上して雪形を目安にすることはなかっただろうとの見方もある。

人の名前と同様に、共通理解のために山名の由来や言い伝えの過程を偲びつつ、古名や現在の統一名を押さえておくことは肝要だ。

だがまたこれも人名同様に、今を生きる個々人の感性でその特徴をとらえたニックネームをつけて愛でれば、いつそう山は自己の根っこに定着し、認識が深まるはずである。

残雪と岩肌の山々に心放ち目を遊ばせて自分だけの雪形を見つけることは、そのための最も手軽で良いきっかけとなる。ただし私も「南沢岳」「白馬岳」と酔って吹聴すべからず、「南白馬岳くらいかなあ」などもフツフツ云うべからず。人の性を肝に銘じ、雪形を愛好し続けたいものだ。

（大町山岳博物館学芸員）

# 大町市における クロツバメシジミの生息状況

清水 博文

長野県大町市には、北アルプス槍ヶ岳の北側を源とする高瀬川がある。高瀬川の上流部の勾配は急流で深いV字谷を形成して居るが、下流部の広大な氾濫原にはクロツバメシジミが生息している。

深尾（一九八九）によると、高瀬川の河原、堤防にはクロツバメシジミの生息地があり、人為や植生の遷移による環境の変化を受け、生息個体数の変動がみられて居ると報告されている。

大町市では近年本種の生息地で工事開発が行われており、その影響等本種のおかれている現状を把握することを目的として発生個体数、生息環境、食草（ツメレンゲ）の自生状況についての調査を実施した。この報告ではクロツバメシジミの生息についてとあわせ紹介する。

## 調査方法および調査地

大町市における分布調査として、生息地の確認とその環境、食草の自生状況について観察調査した。二〇〇一年は、主に食草の分布と環境、生態観察をとおして発生回数を確認を実施した。

大町市平野口から北安曇郡池田町までの高瀬川河川敷左岸を中心に踏査した。高瀬川右岸についての大半と、平地区については未調査域が多いので再度調査する計画である。



写真1. 交尾中のクロツバメシジミ

大町市を調査対象地域としているが、生息地の前後との関連をみるために近隣町村にわたって調査した。調査は筆者単独で行い、調査期間は二〇〇一年四月九日より十一月二十四日まで、休日や勤務後の時間での調査のため、四月に二回、五月三回、六月四回、七月二回、八月三回、九月二回、十月五回、十一月三回、合計二十四回実施した。

## クロツバメシジミ

*Tongeta fischeri* (Eversmann)  
前翅長（前ばねの付根から先端までの長さ）は十二から十四ミリメートルの小さなシジミチョウで、翅の表は黒褐色で後翅には短い尾状突起がある（写真1）。

環境省のレッドデータブックによると、本種は準絶滅危惧（NT）に指定されている。長野県のレッドデータブック（昆虫）はまだ発表されていないが、県の重要昆虫として選出されている。

## 分布

本州関東以西、四国、九州、彦岐、対馬に分布しているが、分布は不連続で生息地は狭く限られている。特に西日本では生息地が減少しているといわれており、新潟県にも生息地があるが、長野県は北限に近い。

全国的にみると特に生息地が多いといわれているが、近年は減少傾向にあるといわれている。

## 生息地

食草であるペンケイソウ科の植物が自生している。



写真2. 食草のツメレンゲ

ている河原や崖などの露岩地に生息する。いずれも日当たりの良い場所に限られている。

田下（一九九六）によると、本種は草原的な明るい環境の原始段階の環境階級に生息している。練石張護岸（石と石の隙間にコンクリートを充填）、空石張護岸に多く見られ、石を使用しているも勾配四十五度以上ではほとんど見られない。また、石と石の隙間に練石をしたものと大きな差はない。緩い勾配護岸では凹凸に適度な土が入り食草が生えやすくなる。適度な乾燥が他の植物の侵入を防ぐ。一般に他の蝶類は森林化がある程度進むとすみ易くなるが、本種の場合異なるという。

## 周年経過

年多化性で暖地では四月下旬より第一化が始まり、十一月下旬ころまでに年四から五回発生し、寒冷地では年三回程度発生する。越冬は幼虫で二齢から終齢と一定でないといわれている。

## 食草

本種の幼虫の食草（餌）はペンケイソウ科のツメレンゲ、イワレンゲ、オノマンネンゲサなどがあるが、大町市付近ではツメレンゲの利用が確認された。このツメレンゲも環境省および長野県のレッドデータブックでは準絶滅危惧に該当している（写真2）。

## 訪花植物

成虫の蜜源植物として今回の調査では、ノミノツヅリ（ナデシコ科）、イヌナズナ（アブラナ科）、ツメレンゲ（ペンケイソウ科）、カワラサイコ（バ





写真8. 良好な生息環境

護岸上部から河原の冠水する付近にまで食草が認められる。蜜源植物も多い。



写真7. ツメレンゲの根元の蛹(緑色型)

ついで古い工事は書類が残っておらず正確には判らないが、護岸の工法により推定できるようで、一九九五年ころより自然石が不足したためコンクリートブロックを使用し始めた。一九六五年までは自然石と混在し、以降はコンクリートブロックの使用比率が高くなる。自然石のみの使用は一九七〇年ころまでと

説明をいただいた。

\*過去に生息記録のある場所で、植生の変化による影響を受けチョウが生息できなくなったと考えられた場所が確認された。これは、食草が自生しているが、草丈のある植物が侵入してきたため、食草が覆われてしまい、開けた空間を好む本種が生息できなくなったと考えられた(写真9)。

\*人為の影響を受け生息できないと考えられる場所として、野焼きの影響を受けていると思われる場所を二カ所確認した(写真10)。

\*大町市の現状としては、本種は限られた環境にしか生息していないため市民のほとんどの方は目にする事が無いと思われるが、希少種とまではいえないであろう。しかし、全国的な規模で見るとどんな河川や崖などでも普通に見られるという種ではない。

本種は本来河川の氾濫などにより食草の生育環境が維持されていたと考えられるが、現



写真10. 葉の先に焼け跡が認められるツメレンゲ



写真9.

ツメレンゲは認められたが植生の変化によりチョウが生息していない地区(過去に生息記録がある)

在のように人工物により生息地が分断されている場合、開発など大きな環境変化の影響は大きいものと考えられる。

今後の課題

未調査地のある高瀬川右岸およびこの他の河川敷での調査。幼虫の体色に変異があるがその出現についての調査研究。

また、継続的に発生数を把握し、環境変化による影響の調査を行う必要性を感じている。

(大町山岳博物館学芸員)

文献

福田晴夫ほか(一九八四) 原色日本蝶類生

態図鑑(Ⅲ)、保育社。

深尾哲夫(一九八九) 長野県安曇野におけるクロツバメシジミの衰亡、日本産蝶類の衰亡と保護 第1集・108-111、日本鱗翅学会。

田下昌志(一九九六) 河川護岸工法とチョウ類群集の多様性、日本産蝶類の衰亡と保護 第4集・119-139、日本鱗翅学会。

山と博物館第47巻第7号

発行 二〇〇二年七月二十五日発行  
〒 長野県大町市大字大町八〇五六-一  
市立大町山岳博物館

TEL 026-221-2101  
FAX 026-221-2133

印刷 大糸タイムス(株)

定価 年額一、五〇〇円送料共(切手不可)  
郵便振替口座番号〇〇五四〇七一一三三三